4　次の文章は、『大鏡』の中の、藤原義孝という若者について述べられた逸話である。この文章を読んで後の問いに答えよ。なお、二つの段落の間に省略がある。 〈富山大〉　二〇一五年度出題

　世の常のなどのやうに、わたりなどにて、おのづから女房と語らひ、 ⒜はかなきことをだにアのたまはせざりけるに、いかなる折にかありけむ、＊に立ち寄りたまへれば、例ならずめづらしう物語りイ聞こえさせけるが、やうやう夜中などにも①なりやしぬらむと思ふほどに、立ちきたまふを、いづへかと⒝ゆかしうて、②人をつけたてまつりて見せければ、＊北の出でたまふほどより、法華経をいみじう尊くじたまふ。＊大宮のぼりにおはして、＊へウおはしましつきぬ。なほ見ければ、東の対のなる紅梅のいみじく盛りに咲きたる下に立たせたまひて、「滅罪、往生極楽」といふ、を西に向きて、あまたつかせたまひけり。帰りて御有様語りければ、③いといとあはれに聞きたてまつらぬ人なし。

　また、＊殿上のエはべりし時、＊さらなり、ことは皆、こころごころに　＊めでたうせられたりけるに、＊このはいたう待たれたまひて、白きどもに、＊の御、＊薄色の御、いとはなやかならぬ＊あはひにて、さし出でたまへりけるこそ、④なかなかに心を尽くしたる人よりはいみじうおはしましけれ。つねの御ことなれば、法華経、御につぶやきて、のの、＊の装束したる、ひき隠して持ちたまひける御用意などの、⑤にこそおはしましけれ。

注　○細殿――内裏での女房の。

○北の陣――内裏の北にある朔平門。

○大宮のぼりに――東大宮大路を北へ。

○世尊寺――『大鏡』の書かれた時代には世尊寺になっているが、義孝の頃は彼の住む邸宅があった。

○殿上の逍遙――殿上人が郊外に出かけて、詠歌・作詩などを楽しむ行事。

○さらなり――言うまでもなく。

○狩装束――狩衣。

○この殿――義孝。

○香染――黄色を帯びた薄紅色の染め。

○薄色――薄紫色。

○あはひ――取り合わせ。

○水精の装束したる――水晶の玉を飾りとしたもの。この数珠で三宝を唱えると大きな功徳があるとされていた。

問１　⒜、⒝それぞれの形容詞の意味を答えよ。

問２　ア、イ、ウ、エの敬語は、それぞれだれのだれに対する敬意を示すか。その人物を答えよ。なお、この中には、語り手からの敬意を示す場合や、また聞き手への敬意を示す場合がある。

問３　傍線①「なりやしぬらむ」を単語に分けてそれぞれの品詞名を示し、活用語の場合はその活用形、更に助詞・助動詞についてはその意味用法を示せ。

問４　傍線②では、内裏細殿の女房たちが「人」に義孝の後をつけさせている。以後の文中でこの「人」が主語となる動詞を、すべて書き抜いて答えよ。

◎問５　傍線③での「人」は細殿の女房たちのことである。居合わせた女房たちは、義孝をつけていった「人」からの報告を「あはれ」と聞いているが、彼女たちは義孝のどのような点を「あはれ」と感じたのか。その夜の義孝の姿をたどって、分かりやすく説明せよ。

問６　傍線④について、「心を尽くしたる人」がどのような人かを明確にしながら、現代語訳せよ。

問７　傍線⑤で、「優」とはどのような意味か。それは義孝のどのような姿について評されたものか。説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　⒜＝たわいない〔「とりとめのない」も可。〕　　⒝＝知りたく

問２　ア＝語り手（の）義孝（に対する敬意）

　　　イ＝語り手（の）義孝（に対する敬意）

　　　ウ＝語り手（の）義孝（に対する敬意）

　　　エ＝語り手（の）聞き手（に対する敬意）

問３　「なり」動詞・連用形　「や」係助詞・疑問　「し」動詞・連用形

　　　「ぬ」助動詞・強意・終止形　「らむ」助動詞・現在推量・連体形

問４　見・帰り・語り

問５　Ａ内裏からの帰途に法華経を誦経し、（世尊寺の）Ｂ自宅に帰った後も紅梅の木の下で西方浄土に向かって何度も額ずいて礼拝するほど、Ｃ仏教に帰依している点。

Ａ＝３〔「内裏から朔平門を出て」などと具体的に記述しているものも可であるが、解答欄のサイズから考えて、このような形にまとめる方がよい。「朗詠し」は減点１。〕

Ｂ＝４〔「額ずいて」「礼拝し」はどちらか一つでも可。〕

Ｃ＝３〔「仏教の信仰心が篤い」も可。〕

問６　Ａかえって心を砕いて装束に気配りしている他の殿上人よりも Ｂたいそうすばらしくていらっしゃった。

Ａ＝５〔「かえって」のないものは減点２。「なまじっか」も可。〕

Ｂ＝５〔「目立っていらっしゃった」も可。〕

問７　（「優」の意味） 優雅（だ）〔「優美（だ）」も可。〕　　  
　　（義孝の姿）Ａ遊びの際にも、いつも通りに法華経を誦経し、Ｂ水晶の飾

りのついた（功徳のあるとされる）数珠を目立たぬように準備している姿。

Ａ＝５〔「遊びの際にも」のないものは減点２。〕

Ｂ＝５〔「目立たぬように」のないものは減点３。〕

【現代語訳】

　（藤原義孝様は）世間一般の公卿（の家柄のご子息）などのように、内裏などで、たまたま（出会った）女房と語り合うこともなく、問１⒜たわいないことでさえもおっしゃらなかったのだが、どのようなときであっただろうか、内裏の女房たちの局である細殿に立ち寄りなさったところ、いつもと違って滅多にないことと（女房たちが義孝様に）お話を申し上げたのだが、しだいに（夜も更け）夜半などにもきっとなってしまっているだろうかと思う頃に、（義孝様が）立ち去りなさるので、どちらへ（いらっしゃるの）かと問１⒝知りたく思って、人をつけ申し上げて（どこへいらっしゃるのかを）見させたところ、内裏の北にある朔平門を出なさるころから、法華経をたいそう崇高な様子で誦経なさる。東大宮大路を北に（のぼって）いらっしゃって、（現在）世尊寺（になっているところのご自宅）へおつきになった。さらに見たところ、（邸宅の）東の対の端近くにある紅梅がたいそう盛りに咲いている下にお立ちになって、「滅罪生善、往生極楽（仏の功徳によって罪を滅し来世の善報のもととし、極楽往生を願う）」という（礼拝の言葉を唱え）、額を西方極楽浄土に向けて、何度もおつきになった。（後をつけていた人は内裏に）帰って（義孝様の）ご様子を語ったところ、ますますしみじみとすばらしいと聞き申し上げない人はいない。

　また、殿上人が郊外に出かけて、詠歌・作詩などを楽しむ行事がございました時、言うまでもなく、他の人はみな、思い思いに狩衣をすばらしく着こなしなさったが、この殿（義孝様）はとても（他の人に）待たれなさって、（幾枚もの）白いお召し物の上に、黄色を帯びた薄紅色の染めの御狩衣に、薄紫色の御指貫（という）、たいして華やかでない取り合わせで、現れなさったのが、　問６かえって心を砕いて装束に気配りしている他の殿上人たちよりもたいそうすばらしくていらっしゃった。いつもの御習慣であるので、法華経を、お口でつぶやいて、紫檀の数珠で、水晶の玉を飾りとした（功徳があるとされる）ものを、（お袖の中に目立たぬように）ひき隠して持っていらっしゃったご準備などが、問７優美でいらっしゃった。